

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目	「芭蕉」を使用する——近現代小説と古井由吉の試み
氏 名	藤田祐史

論 文 内 容 の 要 旨

芭蕉の俳諧にとって小説とは何か。あるいは、小説にとって芭蕉の俳諧とは何か。本研究では、芭蕉句を使用する近現代の小説を対象に、俳諧と小説の関係を二部構成で論じた。

第一部「俳諧と小説の経験——「芭蕉」を使用する人々」（第一章から第五章）では、個々の小説の登場人物による芭蕉句の使用に注目し、ある俳諧が口にされたり、思い出されることで何が起こるのかを問いに、俳諧と小説の関係を論じた。また、第一部では芭蕉句を視点にした小説の精読によって、対象の小説（岡本かの子『東海道五十三次』、川端康成『雪国』、横溝正史『獄門島』、瀧井孝作『野趣』、リービ英雄『千々にくだけて』）の新たな読解を提示した。第二部「俳諧と小説の表現——連句を使用する古井由吉」（第六章から第八章）では、継続的に俳諧を小説に組み入れてきた例として古井由吉の小説を扱い、表現として俳諧を使用する彼の「連句的」作法を論じた。本論全体を通し、従来の受容研究では論じきれなかった人々の経験としての俳諧、あるいは俳諧というジャンルを小説の作法に適用する試みについて、近年のアダプテーション研究の理論も参考に論じた。以下、各章の結論を含む概要である。

第一章「「木枯し」句と旅をする——岡本かの子『東海道五十三次』」では、岡本かの子の『東海道五十三次』を作中の「木枯しの身は竹斎に似たるかな」の句を視点に読み解いた。この小説では、語り手の「私」によって、かつて夫が口にした芭蕉の「木枯し」の句を想起される。この芭蕉句の喚起する世界は「私」の経験する状況に類似しており、一方で「私」は句が引き起こす世界との「ずれ」を感受していく。『東海道五十三次』は書かれた時代とその題材ゆえに、時代の要請する「文化工作」への迎合性が指摘されがちな作品であるが、それに対して本章では、同時代とは別の未来へと向かう期待を書いた小説として読み換えた。その上で、作中の「私」の経験は、芭蕉の「木枯し」の句に対して芭蕉自身とは異なる背景を提供していることを指摘し、「木枯し」の句もまた「私」と共に変容していることを明らかにした。

第二章「天の河」句と連環する——川端康成『雪国』では、川端康成の『雪国』を作中の「荒海や佐渡に横たふ天の河」の句を視点に読み解いた。この小説では、登場人物の一人である島村が物語の末尾近く、雪国の星空に旅の日の芭蕉の姿を思い浮かべる。天の河の存在は作中でその後も幾度に渡って言及され、島村、駒子、葉子の三者の動態を映し出していく。本章では、先行論において主に七夕伝説（織姫星と彦星）との類比によって論じられてきた天の河と作中人物の関係を、芭蕉の物語、タナバタツメの物語、星の神話など、「天の河」句から連想される別の物語と重ねることで、島村たちの行く末までを、「天の河」句の変転する意味と共に読み解いた。

第三章「鶯・きりぎりす・萩と月」句と交流する——横溝正史『獄門島』では、横溝正史の『獄門島』を其角の「鶯の身をさかさまに初音かな」と芭蕉の「むざんやな胄の下のきりぎりす」及び「一つ家に遊女も寝たり萩と月」の句を視点に読み解いた。この小説では、三人の姉妹が上記の句に見立てて順に殺害され、その謎を探偵の金田一耕助が解いていく。本章では、先行論において同時代の言説との類似性から「戦後的」な一面が、あるいは、閉鎖的な島の設定から「封建的」な一面が強調されてきたこの小説を、俳諧の使用という視点から「封建的」と「戦後的」が相克する作品として読み解いた。その上で、この章では俳諧及び現代俳句を使用する推理小説を博捜し、同時代の横光利一の小説との比較も加えて、『獄門島』の位相を定めた。

第四章「市中は」連句と再生する——瀧井孝作『野趣』では、瀧井孝作の短篇『野趣』を作中の連句「湯殿は竹の簀子侘しき／茴香の実を吹き落す夕嵐」を視点に読み解いた。この小説では、痔の治療のために自宅から離れ、鄙びた土地の医院で回復を待つ初老の男性が、その医院の庭を眺めながら『猿蓑』所載の歌仙の一部を思い浮かべる。この連句の喚起する世界は、作中で明記される句の箇所にも留まらず、歌仙全体と小説の描写に重なりが見られ、主人公の男性が連句によって自身のいる空間を認識する様子が見え始める。また、主人公の目に映る空間（の描写）は数日のうちに、春から夏へ、夏から秋へと変化しており、想起される句に伴う季節の運行が描かれる。本章では、このように趣向に満ちた小説として『野趣』を読み解くことで、従来の瀧井に対する「ありのままを素直に書く私小説家」といった作家像の変更を示した。

第五章「夏の海／The summer sea」句と共存する——リービ英雄『千々にくだけで』では、リービ英雄の『千々にくだけで』を作中の「島々や千々にくだけで夏の海／All those islands! Broken into thousands of pieces, The summer sea」の句を視点に読み解いた。この小説では、主人公のエドワードがアメリカに向かう飛行機のなかで眼下に広がる島々を眺めながら、右記の句を日本語と英語とで思い浮かべる。その後、テロ事件の影響からカナダの町に足止めされることになった主人公は、事件の映像を眺めながら、再び同句を想起する。先行論ではマイノリティの言語を選んで書くリービの選択をアメリカの覇権主義に抗する姿勢として論じる読解が見られるのに対

し、本章では芭蕉の句が二つの言語によって想起されるように、エドワードは多言語の飛び交うカナダの街を歩きながら複数のことばを拾い、その複数性をもってテロへの復讐という単一の物語に抵抗していると捉えた。以上、第一部では、俳諧が人の経験と出会うことで何が起こるのか、を問いに各小説を読み解き、「旅」「連環」「交流」「再生」「共存」という答えを導いた。

第二部に移り、第六章「古井由吉と芭蕉——『山躁賦』から『机の四隅』へ」では、古井由吉の小説にとって芭蕉の俳諧とは何か、を問いに、古井が日本の古典と意欲的に向き合いはじめた『山躁賦』から近年の連作短篇集までを広く追い、古井の小説における「芭蕉」使用の特徴を捉えた。また、本章では短篇『机の四隅』について登場人物の位置からの分析も試み、芭蕉の「入月の跡は机の四隅哉」の句に焦点を当てて小説を読み解いた。『机の四隅』の「私」は芭蕉句を使用することにより、複数の物語を呼び起こし、自身と世界についての境目の感覚を鋭敏にしていく。そうした分析の上で、古井の「芭蕉」使用について、連句へのこだわり、連句と小説作法のつながり、境界に対する感覚との連動という三点の特徴にまとめた。

第七章「古井由吉の「連句的」作法とは何か——『野川』」では、前章の流れを受けて、古井の小説にとって連句とは何か、を問いに、彼自身が「連句的」と呼ぶその小説作法について長篇『野川』を中心に論じた。具体的には古井が連句を小説に使用する幾つかの例や彼自身の発言を広く追い、その上で単純に連句が引用されるだけでなく、章と章、章内の挿話と挿話、挿話内の文と文が連句の「付合」に倣って紡がれていることを『野川』の読解を通して指摘した。また、その「連句的」作法によって古井は何を実現しようとしているのか、彼の小説の長きに渡る主題の一つである空襲体験を重ねて考察することで、自らの体験としてでは語り得ない厄災を語るために死者を呼び起こす古井の表現を捉えた。

第八章「厄災を語るための「連句的」作法——『白暗淵』」では、前章の考察を受けて、空襲体験を語る古井の「連句的」作法による小説について、連作短篇集『白暗淵』を中心に論じた。本章では、前章で十分に検討できなかった章と章の「付合」に注目して『白暗淵』を読み解き、境界を越えて異なるもの同士が遭遇し、新たな関係を結ぶ仕組みを設ける古井の方法を確かめた。また、「連句的」作法における厄災の語りについて、他の厄災についての言説と比較し、空襲体験だけでなく、日々の生活に潜む厄災を感受する手法として、前章までの結論を敷衍した。以上、第二部では三つの章を通し、古井の表現である「連句的」作法を追究した。

本研究全体を通して、小説における複数の「芭蕉」の全体像と具体像を提示し、芭蕉の俳諧にとって小説はその詩趣を更新する再創造の場であり、小説にとっての芭蕉の俳諧は未知の表現を拓く動因になることを明らかにした。